



「今は昔、竹取の翁というものありけり。・・・」から始まる「竹取物語」。竹から生まれたかぐや姫が、求婚してくる男性達に難題を突きつけてお断りし、やがて月に帰るといってお話で、皆様もお聞きになったことがあると思います。作者は不明ですが、およそ10世紀頃の平安時代に出来上がったとされる日本最古の小説とされています。しかし、これほどまでに古い物語が、現在の21世紀までどのように受け継がれてきたのでしょうか？その背景の一つには、偉大な日本人の功績が隠されています。

群書類従（ぐんしょるいじゅう）という歴史的価値の高い驚くべき百科事典があります。日本の平安時代から江戸時代初期までに作られたあらゆる分野の書物を集め、約40年かけて塙 保己一（はなわ ほきいち 1746～1821年：以下 保己一）という人物が指揮してとりまとめ、出版されました。その中に竹取物語の資料も含まれていたわけです。

保己一は、現在の埼玉県に生まれ、5歳で目の病を発症し、7歳の時に盲目となりました。光を失ったものの、抜群の記憶力の持ち主で、一度耳にした内容を全て記憶したと言われています。世の中の出来事を「音で知る」達人だったとも言えます。

保己一が生きていたのは18世紀から19世紀にかけての江戸時代でしたが、竹取物語のように10世紀に出来上がった文学は、当時からして約900年も前の古典です。現代ほどのテクノロジーがない時代ですので、情報を永続的に保存することは容易ではありません。しかし、保己一は、竹取物語のような文学だけでなく、歴史、教育、詩文、政治ほか、ありとあらゆる分野にわたって、書物の知的財産としての価値を認識し、当時失われつつあった「日本の心」とも言うべきそれらの書物を世に残すために尽力しました。当時は木の板（板木：はんぎ）を使って印刷していたのですが、板木への彫刻代金だけでも現在価値で5億円から8億円を費やし、群書類従の作成全体に要した経費は、現在価値で十数億円だったと見積もられています。一大事業だったのです。もちろん、お弟子さんや協力者が多数いる中での偉業ではあったのですが、光を失っても耳から聞こえてくる音を頼りに世界を知り、それを後世に伝えることに粉骨砕身したその志には感心せざるを得ません。

1937年（昭和12年）に初めて来日したヘレン・ケラーが横浜港に着いたあと、最初に訪問したのが、東京の渋谷にある温故学会（おんこがっかい）です。この場所は、保己一の偉業を称えるために1909年に渋沢栄一らによって設立された公益社団法人ですが、ヘレン・ケラーは、お母様から「塙 保己一を目標にきなさい」と教えられ励まされたと言っています。

さて、そろそろ医療のお話です。消化器内科では、胃カメラや大腸カメラなど、内視鏡を使った検査を行っています。では、膵臓など、カメラが直接入らない臓器の検査はどのようにしているのでしょうか？がんなどの腫瘍によるしこりが大きければ、CT、MRI、おなかのエコーなどで見つかりますが、膵臓、胆管、胆のうなど「沈黙の臓器」と言われている腸の外の臓器は、CT、MRI、おなかのエコーで病気が見つかった時には、すでに進行していることも少なくありません。それらの「沈黙の臓器」の病気をできるだけ早期に発見するために、当院では超音波という音が出る特殊な内視鏡による検査（超音波内視鏡検査：EUS）を駆使しています。できるだけ早期の段階で病気を発見するために、光だけではなく「音で知る」ことも大切だと言う考えのもとで診療しておりますので、些細なことでも心配事がありましたら、お気軽にご相談下さい。

消化器科 玉置 道生



とうめい厚木クリニック

〒243-0034厚木市船子237

TEL.046-229-3377 FAX.046-229-1935

<https://www.tomei.or.jp/clinic/>

予約・お問合せ電話番号

☎ 046-229-1950